

## モニタリング実施地および生物種の概況

- ・ 7団体による 11 か所のモニタリング結果を公開している。対象種は、調査者及び市があらかじめ協議により決定した調査対象エリアに生息・生育する希少な種及び調査対象エリアの環境の指標となる種並びに調査者が調査時に発見した外来種等とする。
- ・ 定期的な株の計数や観察を行うことができる、植物と鳥類、昆虫を中心に今年の生育・生息状況が報告されている。
- ・ 植物はアマナやアズマイチゲ、ヒメニラなどの雑木林の環境を好む早春植物のほか、里山管理によるリアクションに加えて、人による掘り取りによっても増減するキンラン、ギンランなどの山野草に注目している。また、相模川の河川敷では地域を象徴する絶滅危惧種であるカワラノギクと、その生育環境が競合する恐れのある特定外来種のオオキンケイギクやシナダレスズメガヤについてもモニタリングされている。
- ・ 鳥類はツミやオオタカなどの猛禽類、キビタキやアオゲラなど注目が集まりやすい種について、繁殖状況に着目しているほか、特定外来生物に指定されているワカケホンセイインコやガビチョウの生息状況も報告されている。
- ・ この 2 年間は、いずれの調査地でも、度重なる台風の上陸・接近や、キアシドクガの大発生などの特異な事象、さらにここ数年注目されている、カシノナガキクイムシによるコナラの枯死など、長期的に見ても大きなエポックとなりうるイベントが複層的に環境へインパクトを与えている。
- ・ 自然界の生物の消長は人間の想像以上に振幅が激しく、1 年ごとの増減で一喜一憂すべきではない。しかし、そうした年ごとの変化をとらえることをとおしてのみ、長期的な傾向を読み取ることができる。地域の特性、特色を把握することが生物多様性の基本であることから、今後もモニタリング調査を継続していきたい。

## モニタリング結果の概況

- ・ アマナやアズマイチゲは境川の斜面緑地の他、木もれびの森や東林ふれあいの森などで詳細なカウントが行われ、年による増減はあるものの、おおむね現状が維持されている。これは順応的管理の導入など、その個体群の状況に応じた周囲の植生の管理等を行っている成果と言える。
- ・ キンランやエビネは植生管理や、近年のキアシドクガによるミズキの枯死などの要因によって開花株が増加傾向にある。しかし、開花すると目立つことから、一部では人間による掘り取りによって消失した場所もある。
- ・ ヤマエンゴサクやヒメニラ、ヤマブキソウ、レンブクソウ、イチリンソウは緑区の山麓域以外では境川の斜面緑地に限って分布する植物である。人による掘り取りなどの阻害要因は現状では確認できないが、周辺環境の変化により大きく株数が増減する傾向がある。特にヤマエンゴサクは消長が激しいことがモニタリング調査からもわかり、増減の把握

が難しい性質を持つことが推測される。また、ヒメニラは県内でも極めて稀で、当該調査地は重要な生育地として注目されている。詳細な追跡、観察により生態の新たな知見が得られており、今後の調査活動の進展が期待される。

- ・境川沿いで繁殖期にアオバズクの鳴き声が継続して聞かれている。現在、相模原市内の、特に中央区と南区ではごく限られた場所でしか確認できないため、今後も注意深く見守る必要がある。
- ・コオニヤンマやダビドサナエは減少傾向が報告され、地域から消滅する可能性が指摘されている。今後も注意深く見守る必要がある。
- ・オオキンケイギクなどの特定外来生物は、場所によって増加傾向にあり、すでに広く生育、生息している。特に河原ではシナダレスズメガヤなど、絶滅危惧種のニッチを圧迫していることが報告されており、対策が必要である。
- ・ワカケホンセイインコやガビチョウはすでに定着から長い時間が経ち、大きな変化は認められないが、特にワカケホンセイインコは分布が局在的であるため、地域を絞って考える必要がある。